

Ⅱ 章

特別講演

からだの言い分

作家・福聚寺住職
玄侑宗久



© 菅田純一

脳の世紀といって皆様もりあがっているとところに水を差すようなタイトルですが、「からだの言い分」という演題でしばらくお付き合いいただきたいと思えます。

生命が発生してからの脳の歴史をたどりますと、最近非常に注目されている前頭前野や、大きくいえば大脳皮質は、非常に開発が遅れていた場所のような気がします。ネコにもイヌにもないということは、もともとあまりよい場所ではなかったのではないかと。荒地地に新たに駅ができて急に賑わうようなことがあります、そのような場所が大脳皮質、なかでも前頭前野あたりではないか、という気がしております。そこに、「わたくし」という意識がずんできるとされます。きつとそのせいでしょう、現在の世の中では前頭前野が重んじられすぎていくという気がして仕方ありません。

別のたとえをすると、昔からやっている大きな老舗で、何人もの番頭さんがいてうまくいっているところに、東京から突然どら息子が帰ってきたようなものです。身体のこと小脳という大番頭がやっております、発汗のことも睡眠のことも俺たちにまかせておけという番頭がいっぱいそろっているところに、ちよつとコンピュータを学んだくらいの若い衆が戻ってきたため、からだの言い分、いわば古番頭の言い分をうまく聞き取れず、会社経営に難渋しているのが、現代社会の行き詰まりではないかという気がするのです。

三蔵法師がインドから持って帰られたお経のなかに「唯識仏教」があります。唯識仏教はこころをどのように認識していたか。

感覚とからだ、そこに発生するいろいろなものの関係において、基本的には六つの器官を考えています。「眼耳鼻舌身意」。身は皮膚、触覚です。身のあとに意識の「意」がきます。ですから、目がとらえた結果としてのものを眼識げんしき、耳がとらえた結果を耳識にしきといいます。このように五感による五つの世界がきて、最後にくるのが意識です。意識はもともと仏教語です。意という感覚器官がとらえた結果を意識と呼んだわけですね。

ただし、唯識仏教ではそれではすまないと考えて、いわゆるフロイトが潜在意識と呼んだ部分に、末那識まなしきを想定しました。これは第七識です。そして、そのもつと奥深くに第八識の阿頼耶識あちやしきを想定しました。この阿頼耶識は、ユングが集合的無意識とっているものにほとんど重なります。ユング自身が仏教のなかの理論に触れて集合的無意識を提案したともいわれています。

意識は、われわれが認識できる世界ですが、その下に末那識と阿頼耶識、すなわち潜在意識と集合的無意識があります。この関係はどのようになっていのか。

最近、ユング派の心理療法家でも物理学者のアーノルド・ミンデルが、意識がない、あるいは意識が混濁していたり、アウトプットがうまくいかなかった人々と会話できると

いう研究成果を『昏睡状態の人と会話する』（NHKブックス）で発表しています。昏睡状態に陥っても、インプットがちゃんとしている方は結構います。その方と「イエス」のサインと「ノー」のサインさえ決めることができれば、かなり複雑な会話もできるといいうのです。

最近では、死ぬときどうするかを元氣なうちに決めておく方がおられます。しかし、元氣でなくなると気がかわるかもしれません。本当は、そのような状態になってからあらためて訊いてみないとわからないわけです。ここでは、意識を重んじすぎることの怖さがあらためて浮き彫りになります。

また、アーノルド・ミンデルは、痛い部分からだのどこかにあつたとすると、そこには末那識、潜在意識が関係しており、なにもしないのだからだが痛い場合は潜在意識が、押せば痛い部分には集合的無意識が関係しているという発言もしています。

皆様も実感がおありだと思えますが、意識がとらえられる部分はものすごく狭いと思えます。京都大学の総長をされた医師の岡本道雄先生が、退官記念講演で「われわれ人間にわかつている人体のことは、おそらく四割弱だろう」とおっしゃっています。最大まで学んでも四割いくかいかないかしか人体についてはわかっていません。しかしそれでもうまく機能しています。無意識のあいだにうまくいっているのは、もちろん番頭さんのはたらきのお陰

です。そこに東京から戻ってきたら息子が、番頭さんとどうつきあえばよいのか、これが今回のテーマに関わる重要な問題なのだと思います。

たとえば、筋肉も不思議なものです。ある一定の運動を、たとえば三回やったとしても筋肉はつきませんが、毎日何回か以上やると、筋肉をつくるはたらきが動きだすみたいです。しかしいったい、その数は誰が数えているのか。むろん意識して数えているわけではありません。ですが確実に、これ以上繰り返せば筋肉がついてくるという閾値がありますから、どこかにカウンターがあるはずですが、それはどうも脳ではないようです。

意識がからだの思いをとらえきれていないという意味で一番象徴的なことは、意識は常に「わたくし」というものと絡みますので、意思とか思いになります。そのため、いやなことが重なったりすると、死んでやると思う人も最近では多い。しかし死んでしまうぞと思っているのは、たぶん前頭前野だけです。どうやって死のうかといろいろ考えて、たとえば水に飛び込むことになりましたが、ここで非常におもしろい現象が起こります。

いちおう、若いながらもどら息子は社長のつもりでおり、その若社長が全身を統御している気持ちで、死ぬぞといっているのですが、他のからだの部分は、じつはどこも死ぬ気になっていません。右手も左手も、左足も足の裏も、どこも死ぬ気になっていない状況ですか